どうという反応なしに時が流れた。今回も同じものを大鶴市長して、お願いしたわけである。

佐伯文化会館が、毛利藩政の中心であった三の丸に建設されて、各種の文化活動に利用され、佐伯全地域の文化高揚の舞台となっていることは、快心のことである。

さらに、郷市民の待望久しい図書館も、市の中心部に程遠からぬところに建設されるという。好学の士に落ちついて読書し、研究や調査する場が提供されることは、嬉しいことである。

しかし、文化会館と図書館と、二本柱だけでは、佐伯の文化を支える柱として不安定である。そのもう一つの柱が、この「歴史民俗資料館」である。

藩祖毛利高政地いてすでに三百五十余年、時は刻々と流れ、世情は大きく変転し、貴重な史料はどんどん破損亡失する。前に述べた毛利家の膨大な歴史資料や、民間に散在する貴重な民俗資料も例外ではない。今にして蒐集・保存の手を打たなくては、佐伯人士は湿故（拠るきを尋ねる）の資料を失うことになる。これが私たちの「歴史民俗資料館」の建設を要望する理由である。

静かな環境、完備した施設、綜覧に収蔵された資料を、自在に調査・活用して研究出来る日を待つこと切である。

大鶴新市長の文化行政に期待しつつペンを擱く。

（おわり）

（1頁のつづき）

歩道橋を設置する。

㊃ 総事業費五億六千万円（私有地取得費は含まず）財源は佐伯市及び市民の浄財、商社の出資寄付等。

（この「報告書」寄稿を受けている会員の関賀歓迎）

郷土

佐伯の新しい顔

大手前から三の丸にかけて、どのように変ろうとしているか。
「佐伯地域商業近代化実施計画報告書」に見る——
主要点の抜書き、（番号は便宜上当方でつけた）

㊀ 佐伯市・南海部郡内の史跡名勝としては、城山・懐明台・三の丸御殿・櫓門・武家屋敷・養賢寺・国木田独歩止宿先・十三重塔・大入島・陸軍要塞跡・猪垣・暁嵐の滝等、枚挙にいとまがない程である。

㊁ これらのうちから早期整備計画の対象として、城山・櫓門・武家屋敷・農義山・中江川河畔・大入島であった。観光対象は、大分市民三五万人を中心とする県内各地の人々であり、いわゆる観光よりもレクリエーション的性格を強調し、日帰りで家族連れで楽しむ町づくりを強調した。

㊂ この場合、佐伯市を代表する顔づくりの必要性が論ぜられ、大手前を「佐伯市の顔」とすることでも各界各層の意見の一致を見た。

㊃ 藩祖以来、歴代藩公の治政が、今日の地域に於ける林業・水産業隆昌を築いたものである。大手前（一三の丸）（帯を「佐伯市の顔」とすると共に、歴代藩公を顕彰する毛利公記念公園としようとするものである。（交渉・手続きを経て、土地を確保すること決行）

㊄ 計画の内容（その主な点をまとめると——）

○大手前—三の丸の道路を20㍍に拡幅、その左手一帯を公園とする。

○従って大手前から三の丸櫓門・石垣が望見されるようになり、左側の歩道に面して日曜朝市を開設する

○公園の左斜（今の産院付近）に「郷土史料館」（三階建）、大型車場、広場、滝、池、植込みをつくる。

○今の大手前公園（寿屋前）をバスターミナルとし、今のバスターミナルの敷地を小公園とする。

○大小二つの公園、バスターミナル、寿屋を結んだ形の円型の

（上段につづく）